

大坂 おおさか
大坂

【原文・書き下し文】

- | | | |
|---|---|--|
| 1 | 拔 _レ 地金城枕 _二 水濱 _一 | ちぬ きんじょう すいひん まくら
地を抜く金城 水浜に枕し |
| 2 | 繁華敢 _レ 譲昔年春 | はんか あ ゆず せきねん はる
繁華 敢えて譲らん 昔年の春に |
| 3 | 霸王功業存 _二 餘勢 _一 | はおう こうぎょう よせい そん
霸王の功業 余勢を存し |
| 4 | 商賈交通扼 _二 要津 _一 | しょうか こうつう ようしん やく
商賈の交通 要津を扼す |
| 5 | 壯矣始皇吞 _二 六國 _一 | そう せい りつこく の
壮なるかな 始皇 六国を吞む |
| 6 | 惜哉二世失 _二 三秦 _一 | お せい さんしん うしな
惜しいかな 二世 三秦を失う |
| 7 | 視 _レ 今懷 _レ 古情難 _レ 歇 | いま いにしえ おも じょう や がた
今を視て 古を懷えば 情 歇み難く |
| 8 | 復使 _二 英雄淚滿 _レ 巾 | また えいゆう なみだ きん み
復た英雄をして 涙 巾に満たしむ |

【平仄・詩型・押韻】 ○平声 ●仄声 ◎平声の押韻

- | | |
|---|-------------|
| 1 | ● ○ ○ ● ● ◎ |
| 2 | ○ ○ ● ● ○ ◎ |
| 3 | ● ○ ○ ● ○ ● |
| 4 | ○ ○ ○ ● ● ◎ |
| 5 | ● ● ● ○ ○ ● |
| 6 | ● ○ ● ● ○ ◎ |
| 7 | ● ○ ○ ● ○ ● |
| 8 | ● ● ○ ○ ● ◎ |

七言律詩

『広韻』上平十七眞(濱・津・秦・巾)、十八諄(春)同用。『平水韻』上平十一眞。

【校勘】

0 大坂 明治二十五年(1892)に編纂された『清狂遺稿』は「大阪」と題するが、松陰神社宝物殿至誠館蔵の③標題『清狂吟稿』(第一冊に収録する③ a『清狂吟稿』卷之一は月性直筆の写本で、そこには「大坂」と題す。これは「大阪」は明治になってからの正式な呼称で、それ以前は一般的に「大坂」が使われていたことによる。

2 敢 松陰神社宝物殿至誠館蔵の③標題『清狂吟稿』(第一冊に収録する③ a『清狂吟稿』卷之一では、もとこの字を「豈」に作っていたが、朱筆で「敢」に改める。

【現代語訳】

大坂

大地にそそり立つ堅固な大坂城は海を臨み、町の賑やかさといえばどんな昔の春にも劣らない。天下に覇を唱えた者のその偉業はいまなお余勢を駆り、商人たちの往来にこの地がその要となっている。

壮大なことよ、秦の始皇帝は戦国の六つの国々を併合してしまった。しかし惜しいことよ、その二世皇帝が秦の地を失うこととなってしまうとは。

今の世を見て昔のことに思いを致せば、感情が次々と湧き起こるが、またしても英雄たちに手拭いっぱいに涙を溢れさせるということになる。

【解題】

この詩は、天保五年(甲午 一八三四)、月性十八歳の秋、豊前の蔵春園を発ち、翌年の初めまで、大坂や京都に遊んだ時の作。豊臣秀吉(1582-1598)が大坂城を築き、天下の台所と称された大坂の町の賑わいを目のあたりにした時の感動と、しかしいまや政権は江戸に移ってしまったことへの推移の悲哀を内容とする。

【語釈】

1・2 先ず大坂のランドマークである大坂城に目が行き、そこから大坂の町全体の賑わいへと視点が移る。 1 拔地 大地から抜きん出て聳えている。西国の田舎から瀬戸内海を舟でやってきた月性の目に先ず大坂城が聳え立って見えたというのである。南宋、張栻「鴈蕩山靈巖寺の壁に書す(書鴈蕩山靈巖寺壁)」詩に「諸峰 地を抜き 雲雨に上り、万壑〔無数の谷〕 泉を出して 佩環を鳴らす〔泉から湧き出る水のせせらぎが、輪の形をした帶玉が触れあう音のようである〕(諸峯拔、地上雲雨、萬壑出泉鳴佩環)」。 金城 堅固な城。中国の〈城〉とは、町全体を城壁が囲んでいることから、長安城のように長安の町そのものを指す場合が多く、日本の大坂城や姫路城などのcastle(キャッスル)をイメージすると誤解が生まれることがある。『漢書』「蒯通伝」に「范陽の令〔長官〕 先に降りて身死せば〔まっ先に降参して殺されるようなことになれば〕、必ず将に城を嬰らし〔他所の者たちはきつとみな城壁をめぐらし〕 固く守り、皆金城湯池と為りて、攻むべからざるなり(范陽令先降而身死、必將嬰城固守、皆為金城湯池、不可攻也)」とあり、唐の顔師古の注も、〈金は以て堅きを喩え、湯は沸熱〔たぎるように熱い〕を喩え、近づくべからず(金以喻堅、湯喻沸熱、不可近)と記すのは、〈金城〉が城壁で堅く守られた町であることをいう。しかし日本の漢詩人がこの〈金

城」ということばを用いる時には、castle(キャッスル)をイメージさせるものも多く、(こ)も大坂城を指している。草場珮川(1788-1867)「承弼の大阪城の作に和す(篠崎小竹が作った大阪城の詩に唱和する) (和承弼大阪城作)」詩にも(石山 曩日 梵王の楼(石山はむかし浄土真宗の石山本願寺の寺楼があつたが)、化して金城と作り帝州(天皇の居る都の地)を護る(石山曩日梵王樓、化作金城、護帝州)と詠む。

枕 面している。『漢書』「嚴助伝」に(會稽は東に海に接し、南は諸越に近く、北は大江に枕す(會稽東接於海、南近諸越、北枕大江)とあり、唐の顔師古の注に(枕とは、臨むなり(枕、臨也)と記す。

水濱 大阪湾の海辺。

2 繁華 もと咲き誇る花の様子からさらに派生して、都会の繁栄ぶりをいう。劉宋、鮑照「詠史(過去の歴史を詠む)」詩にも、都会の賑わいの儂さを美しい花の咲き誇る春に重ねて、(寒暑 一時に在り(季節は移り変わるものである)、繁華 春に及びて媚し(寒暑在一時、繁華及春媚)と詠む。「廣島」詩(『清狂遺稿』上二五歳に(繁華 或いは 浪華津(大坂)に比す、況んや又た鶯花三月の辰なればなり(繁華、或比浪華津、況又鶯花三月辰)。敢讓 どうして……に譲られようか、いやけつして譲れない。散文には頻出する言い方だが、詩語としては意外に少ない。

3・4 大坂繁栄の理由を、豊臣秀吉の功績と地政学的有利性に述べる

3 霸王 天下の覇権を勝ち取った者、(こ)は豊臣秀吉(1537-1598)を指す。 功業 功績。豊臣秀吉が天下に覇を唱える拠点として大坂を選び繁栄させたこと。 餘勢 残った勢い。松陰神社宝物殿至誠館蔵の④標題『清狂吟稿』(第二冊)に収録する④b『草稿』の「北條小湊の大坂の邸監(長州萩藩蔵屋敷)に赴任するを送る(送北條小湊赴(もと(趣)に作るも改めた)任於大坂邸監」詩(三九歳にも、大坂について(一朝の余勢 商家に帰し(商人の町となった)、甞年の流弊(徳川二百年の悪習) 繁華を趁う(賑やかさだけを追い求めた)(一朝餘勢帰商家、甞年流弊趁繁華)と詠む。

4 商賈 商人。前掲の「北條小湊の大坂の邸監に赴任するを送る」詩に(到る日(大坂に行ったら) 城中の花柳(大坂の色街)に遊び、商賈に従いて風流を競うこと勿かれ(羽目をはずしてはならない)(到日城中花柳遊、勿從商賈競風流)。

交通 人の往来や荷物のやりとり。 扼 押さえる。

「今茲六月、墨夷(アメリカ)の軍艦四隻、浦賀に來たりて泊し、幕府 諸藩に命じて戍兵(守りの兵)を出し、以て近都(江戸近郊)の海岸を防禦せしむ。相い伝うるに、当時 我が藩は大森(江戸の南の海岸)の營にて、武備 殊に具われば、乃ち此の詩を賦して、前参政の村田松齋翁(村田清風)に贈る(今茲六月、墨夷軍艦四隻、來泊浦賀、幕府命諸藩出戍兵、以防禦近都海岸。相傳、當時我藩大森之營、武備殊具、乃賦此詩、贈前参政村田松齋翁)詩(『清狂遺稿』下三七歳に「総海(上総と下総の房総半島あたり)は会津 要衝を扼し、凜然として(守りの厳しいさま) 誰か其の鋒(会津の守り)を犯すを得ん(總海會津扼要衝、凜然誰得犯其鋒)」。 要津 重要な渡し場。転じて水陸交通の要路の意味にもなる。「魯西亜の軍艦 摂海(大坂湾)に入るを聞き、驚いて作る(聞魯西亞軍艦入攝海、驚而作)」詩(『清狂遺稿』下四四歳)に(兵備を嚴にして要津を扼せず、夷艦(外国の軍艦) 摂海の浜に飛來す(不嚴兵備扼要津、夷艦飛來攝海濱)。

5・6 中国の史実を借りて日本の政權の移り変わ

りを歎く。 5 壯矣 なんと壮大なことよ！〈矣〉は、詠嘆を表す助字。助字については、「落花吟」其四の【語釈】6〈已〉を参照。 始皇帝吞六國 周王朝が権威を失うと、韓・魏・趙・楚・燕・齊・秦の七つの国の諸侯たちが天下に覇を唱える野望を抱いて互いに鎬を削り合うという戦国時代に突入し、最後に六つの国を併呑して天下統一(B.C.221)を果たしたのが秦の始皇帝(姓は嬴、名は政 B.C.259-B.C.210)であった。因みに〈皇帝〉という呼称は彼に始まり、最初の皇帝だから〈始皇帝〉という。 6 惜哉 なんと残念なことよ！〈哉〉は、前の句の〈矣〉と同じく詠嘆を表す助字だが、仄声〔●〕に属する〈矣〉とは反対の平声〔○〕に属する字を用いなければならぬことから、この〈哉〉を使っている。【平仄・詩型・押韻】を参照。 二世失三秦 始皇帝が亡くなると、若き二世皇帝(名は胡亥 B.C.230/221-B.C.207)が後を継いだだが、反乱が起るなど政治的混乱の中で自害に追い込まれて秦王朝は倒され、新たに劉邦「漢の高祖」の漢王朝が築かれた。〈三秦〉は、滅ぼされて三つに分割された秦のものと領地。 7・8 この詩の主題である大坂の町の移り変わりへの感慨を中国の有名な詩で代用して結びとする。 7 視今懷古 現在のありさまを見て、昔を偲ぶ。ここは現況を否定するニュアンスがある。北宋、晁以道「京を出でて事に感ず〔都を離れることになり心に沸き起るものがある〕(出京感事)」詩に〈晩歳〔年の暮れ〕 長途 俱に寂寞として、今を傷み古を懷えば総て飄零たり〔何もかもが定めなくフワフワとしたものなのだ〕(晩歳長途俱寂寞、傷今懷古總飄零)〉。 情難歇 込み上げる気持を抑えることができない。元、葉顥「春雪」詩に〈酒酣にして剣を舞わして 情歇み難く、銀瓶を指點して〔銀製の酒器を指さして〕 竭きせしむること莫し(酒酣舞劍情難歇、指點銀瓶莫教竭)〉。 8 復使英雄淚滿巾 唐、杜甫「蜀相」詩は、三国時代、蜀の宰相、諸葛孔明が魏と戦うために出陣するも、戦地で病に倒れ天下統一の宿願を果たすことのできなかったことを悼む内容で、最後に〈師〔軍隊〕を出だして未だ捷たざるに〔勝利しないのに〕 身は先に死し、長えに英雄をして涙襟に満たしむ(出師未捷身先死、長使英雄淚滿襟)〉と後世の英雄たちの涙を誘うと詠んでいる。〈復〉は、ふたたびの意味で、この杜甫の詩句が詠むように同じくまた豊臣氏が天下を維持できなかったことに英雄たちの涙を誘うと言うのである。

【補説】

『清狂遺稿』には、坂井虎山(1798-1850)の評語として、〈僕も亦た「大坂」の作数首有り。其の一聯「二句を併せて一聯」に曰く、《秦・隋 当年 二世に亡び、猗・陶〔春秋戦国時代の大富豪の猗頓と陶朱公范蠡〕今日 諸侯より富めり》と。又た七八〔別の詩の第七句・第八句〕に曰く、《誰か知らん 余勢 豪賈〔豪商〕に帰し、物価 低昂 海内の権なるを〔天下の物価の高低を決める力がある〕》と。頗る以て的切〔適切な表現〕と為すも、性公〔月性〕既に言えるを知らず(僕亦有大坂作數首。其一聯曰、秦隋當年亡二世、猗陶今日富諸侯。又七八曰、誰知餘勢歸豪賈、物價低昂海內權。頗

以為的切、而不知性公既言矣」と坂井虎山が作った大坂の詩がうまく詠み込んだと思っていたのが、実は月性に先に言われてしまったという。